

## 巻 頭 言

3月27日の総会で思いもかけず理事長を拝命致しました。私ごときにこの大役が務まるかたいへん戸惑いを覚えますが、あれから1週間、森田康夫前理事長が軌道に乗せられた様々な日本数学会改革の進行状況を目と耳にし、進むべき方向へさらに加速することが、これまでお世話になった数学会への恩返しと思うようになりました。

新理事長は、数学通信に巻頭言を記すことになっています。森田前理事長、また楠岡前々理事長は、時代を反映した日本数学会が進むべき方向を明快に記されています。私にはそのような技量はないので、ここでは徒然なるままに思うことを記したいと思います。

いささか死語になりつつありますが、「読み書きそろばん」という寺子屋教育を記す言葉があります。ある人（正確にはあるグループ）は、この言葉を「読み、書き、話す技術」と置き換えて、現代の教育論の原点としました。たいへん説得力のある意見ですが、私は、文化の質のレベルに対する誤解があると感じます。「話す」という作業は、その質を問わなければ、現代の人間であれば誰もが必然的にせざるを得ない事であり、またできることでもあります。だから、「話す」は文化形式の質を問う立場からは「読み書き」と同等ではありません。他方、「読み書き」は高度な文化を形成する基本です。確かになくても生きてはいける、が、あれば、日々の生活の知的生産性が豊かになります。日本に「読み書きそろばん」という言葉があるのは、「読み書き」に加え、「そろばん」の高度な文化的形成の素地としての重要性が、寺子屋の時代から認識されていることの証だと思えます。これは、数学にとってはたいへんありがたいことではないでしょうか。

日本数学会は、日本にはこうした数学の文化を大切に作る土壌があることを踏まえ、次の正しい一歩を踏んでいくのが最善と考えます。私自身まったく微力ではありますが、この一年、皆様のご協力を頂きたく、よろしくお願い申し上げます。

（理事長 小島 定吉）